

モンゴル草原の旅

田 中 桃 三

2011年、今年の花葉会の海外調査会はモンゴルへ行くことになった。

われわれ花葉会は、いままでヨーロッパ、オセアニア各地などをまわってきた。だが、ヨーロッパと日本の中間地帯にあるモンゴルについては、これまであまり情報がなく、分からない面も多かったが、探索に行くことにした。

7月13日

首都ウランバートルへ

成田を出発し、首都ウランバートルに直行した。韓国、中国北部を、文字通り直行し、5時間ほどで着陸した。

町の中心部はビルもあり活気を感じたが、少し道を走ると路面は傷み放題で、街路樹などの手入れも行き届いていなかった。そのため市内の道路の渋滞は日常化している。モンゴルの日常語はモンゴル語とハルハ語であるが、文字はキリル文字（ロシア）をつかい、看板などにもキリル文字で書かれていることが多い。

国土は150万平方キロと広いが、人口は270万人と極めて少ない。中国とロシアに挟まれ、国土の4分の1はゴビ砂漠で、乾燥地帯ではあるが、北部地帯は夏は降雨もあり、数多くの湖水があり、森林地帯もある。

初日は到着が午後6時と遅かったので、そのまま市内中心部にあるジンギスカンホテルに宿泊した。

7月14日

ホルジト

翌日、われわれ一行18人は、50人乗りの大型バスに乗り、東へ300キロほど離れた「ホルジト」へ向かった。

道は郊外へ出るとまもなく舗装が壊れ、やがて舗装もなくなり、特に幹線を離れるともものすごい荒れ道になり、時速10～20キロぐらいの速さでしか走れない状態になった。途中はなだらかな丘陵地帯で、草丈の短い草原が発達していた。草原には、ところどころゲル（大型のテント）が点在し、ヒツジ、ウシ、ヤギなどの放牧が行なわれていた。ゲルは1軒の場合もあり、2～3軒まとまっているところもあった。多くは電気

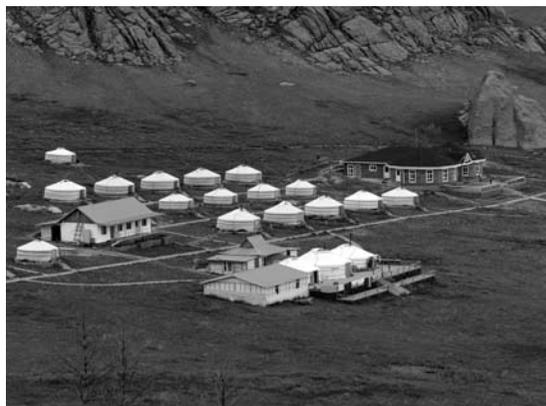
が引いてあり、自動車がとまっているゲルもあった。

ヒツジは白、黒、茶など、結構カラフルで、元気に走り回っていた。ウシは乳牛と思われるが、やはりいろいろな色の牛がのんびりしていた。あとは少数の馬とラクダと犬がバスからみられた動物のすべてであった。土は礫混じりの粘土質で、排水は悪く、少しの雨でもぬかるみになるとおもわれた。

悪路のなか、夕方になって、目的地のホルジトにいたが、周りに花は全く無いのである。当初の説明では一面の花畑で、そこで3泊して花の探索をするつもりであったのにである。その上宿泊所であるツーリストキャンプがひどい状態で、シャワーは壊れており、トイレも明かりがつかない状態であった。



ヒツジ、ヤギの放牧の風景



ツーリストキャンプの情景

ガイドさんに理由を聞くと、今年は春に降雨が少なく、例年花畑になる場所に全然花が咲かず。そのことの連絡が無かったとのことであった。

しかしここで3泊もするわけにいかないので、翌朝またガタガタ道をウランバートルに引き返した。

7月16日

バヤンゴル

翌日はガイドさんと、モンゴルの植物専門の大学の先生の案内で北へ向かい、80キロほど離れているバヤンゴル付近まで行った。

道の横には川が流れており、道の両側の土手にカンパヌラ、リナリヤ、キスゲ、スターチス、イトハユリなどが咲いており、ようやくいままでの疲れを一気にいやすことができた。またこの付近まで北上すると樹林帯もあらわれ、針葉樹に混じって白樺なども見ることができた。

7月17日

テレルジにて

その後、一度ウランバートルへ戻り、予定より一日早くテレルジに向かった。相変わらず道路は悪くのろのろ運転であったが、夕刻に無事に着くことができた。

テレルジはヘンテイ山脈の南端に位置し、上部は岩山で奇妙な形の岩が多く、この一帯は国立公園として保護されている。

モンゴルの7月はいい気候で、昼間は日光が強く暑いが、湿度が無いのでしのぎやすい。夜は15度ぐらいまで下がったが、暖房を入れるほどではなかった。雨にも何回か降られたが長く続くことは無く、両具もほ

とんど使わなかった。

テレルジの宿泊所もツーリストキャンプだが、ホルジトより整備されており、快適な夜を過ごすことが出来た。キャンプはやはり30棟ほどのゲルと事務棟（フロント）、食堂棟、トイレ、シャワー棟などにわかれており、1棟のゲルに4つのベッドがあり、真ん中にはストーブがあった。夜はハダカ電球が一つだけであるだけであった。キャンプの立地は丘の斜面の下部にひろがっており、ゲルの間はコンクリートの道であり、側溝も掘られているので雨で浸水することは無かったが、雨漏りはあった。

キャンプの敷地の中や付近には、エーデルワイス、ナデシコ、ルリタマアザミなどがあちこちに咲いており、あたかも花畑の中でキャンプをしているような気持ちであった。

草原のところどころに穴があり、ザリスが住んでいる。時々立ち上がり、まわりを警戒して走りまわっていた。彼らはゲルのそばや通路にも姿をみせていた。そして上空には、小型のタカなどが彼らを狙って遊泳していた。

翌日はガイドさんと先生の案内で付近を探索した。ただし先生は日本語はもちろん、英語も喋れないので、ガイドさんを通じての会話はもどかしいかぎりであった。そこで知りたい植物があると、その脇に先生に学名をかいたラベルをおいてもらい、名前を覚えてもらうことにした。

この地の標高は約1000mであるが、日本中部山岳の標高1500～2000mぐらいのところの植物相と似ている。キャンプ地のまわりでは、ペロニカの紫、エーデルワイスの白、アズマギクのピンク、デルフィニュームの濃い紫、その他の花が一面に広がっている。ガイドさんの話では、ここはオキナグサの群生地だが、開



Leontopodium ochroleucum
(エーデルワイスの仲間)



Delphinium cheilantheum



Limonium sinuatum



Dianthus versicolor

花期は6月初めとのことであった。確かに、結実している株が多かったが、そのうちにぼつぼつ遅れて咲いているオキナグサを見つけることが出来た。

丘の上のほうは岩が露出しており、乾地性の植物が多く、ツメレンゲやヒナゲシなどがあり、岩にエフェドラがなかば砂にうずもれて赤い実をつけていた。斜面を下るとサルビアが数種類あり、カンパヌラ、フウロソウ、シオガマの仲間もあり、小川のほとりではハナシノブがあり、大型のカンパヌラも開花していた。川岸のひらけたところにはマイヅルソウもあったが、ほかの湿地性の植物は少なかった。

7月19日～

ガンダンジ、ウランバートル、帰国

大体この場所で植物探査の旅の目的はほぼ達成されたので、翌朝出発し、乗馬などを体験しながら、チベット密教の聖地ガンダン寺を訪れた。

大きなお寺で、拝殿までには長い階段があったが、全員なんとかお参りすることが出来た。その拝殿の脇



Lilium pumilum
(イトハユリ)



Ephedra sinica

にも、イトハユリ、ヒナゲシなどが雑草状態で生えており、われわれの目を楽しませてくれた。

その後ウランバートルへもどり、伝統音楽歌舞を鑑賞し、モンゴルのすべての日程を終了した。

翌朝早朝3時に起床して、台風の襲来を心配しつつ、無事成田に帰着することができた。

今回と昨年の花葉会の園芸事情調査の旅は、栽培植物の原種や原産地を訪ねる旅であった。今年もデルフィニュームやスターチス、カンパヌラなどの原種にめぐり合うことが出来た。モンゴルはやはりヨーロッパと極東アジアに中間に位置することが、植物を見てあらためて実感することが出来た。

次回の花葉会の旅行は、また初心に戻り、楽しい旅行を企画したいと思う。